利尻研究 (27): 33-39, March 2008

利尻島鴛泊における袋澗の測量調査

山谷文人

〒 097-0101　北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野　利尻富士町教育委員会

The Survey of Fukuroma at Oshidomari, Rishiri Island

Fumito Yamaya

Rishirifuji Town Board of Education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

Abstract. The herring fishing industry prospered in Rishiri Island throughout the mid-20th century. Fukuroma refers to a kind of small harbor as a shelter for catches of herrings or ships from a stormy sea. Izumi's Fukuroma, which is one of the existing Fukuroma in this island, is about 1.5 to 3.0 meters in height and was built of pyramid stones. From old maps, old documents, interviews and comparison with other Fukuroma, it is estimated that this harbor predates the Taisho Period. A survey map and cross-section of this Fukuroma are shown in figures for the first time.

はじめに

利尻島は，江戸時代より場所請負制度の管下にあって，礼文島を含むリイシリ場所が開設されていた．当時から，ニシンは島の産物として代表的なもので，それは明治・大正・昭和を経ても変わらず，明治以降の開拓の歴史に深く関与してきた．しかし，昭和 30 年頃を境にニシンが獲れなくなると，島の産業・経済は大打撃を受け，漁業形態の転換や観光産業への転換を余儀なくされていった．

さらに，時代が進むにつれ，現在では当時のニシン場の記憶も 70 歳代以上の方々に限られるなど，過去の栄華も忘れ去られようとしている．

また，記憶に限らず，ニシン場で使われた漁具や遺構も失われつつある．このうち，漁具などの動産資料については，資料収集によっていくらか保存可能であるが，遺構の保存についてはほとんど着目されていないのが現状である．本稿で取り上げる「袋澗（ふくろま）」もまた，往時のニシン場遺構として重要な土木遺産であるが，島内では波浪や築港による破壊が進んでいる．

そのなかにあって，鴛泊字栄町にある通称「泉の澗[1]」（図 1 ～ 3）は，保存状況もよく現在も船澗としての役割を担っており，町民にもよく知られている．また，日本の近代土木遺産として，現存する重要な土木構造物にも選ばれている（土木学会土木史研究委員会，2000）．こうした背景から，利尻富士町教育委員会では，保存状態のよいうちに測量を実施することにした．本稿では，その測量調査について報告するとともに，構造や築造年代，文化財的価値について考えてみたい．

袋澗とは

袋澗は，北海道日本海沿岸にのみ設けられたもの（河野, 1987）で, 積丹半島周辺を中心に, 奥尻島・利尻島・礼文島などの離島にも分布している．山田（1999）によれば，袋澗は春先のニシン漁期に吹く南西から北西の強い季節風による波浪の強さに対応した多目的施設（船留り，避難港，袋網の一時保存）として開発・築造された．つまり，ニシン漁では時化に襲われると大きな枠網に詰めたニシンを海

図1．泉の澗．澗全体（ペシ岬頂上から）．

中に放棄しなければならない危険性があるため，それをたくさんの袋網に分け沖合から輸送し，海岸の近くで一時貯蔵するための施設，すなわち波除けのための堤体が必要であった．こうした袋澗の開発は，当時としては画期的な技術で漁獲量の増加にもつながったといわれる．

利尻島内に残る袋澗

島内の袋澗については，工藤（1985，1986，1991）と山田（1999）に詳しい．かつては，全島的とくに岩礁地帯の御崎や仙法志一帯に多く分布し，南浜にも存在した．また，礼文島で袋澗作りをしていたという秋田米作氏の回想によれば，礼文島には60ヵ所，利尻島には30～35ヵ所の袋澗があったという（北海道文化財研究所，1987）．だが，現在袋澗として認識できるのは，御崎地区をはじめ鴛泊：泉の澗，久連：平田漁場の袋澗（一部残存），仙法志：伊藤漁場の袋澗に限られている．

調査方法と結果

測量調査は，平成19年8月23･24日に実施した．堤体の測量には，トータルステーションを用い，構造については肉眼観察とスケッチにより行い，適宜記録写真を撮った（図4）．

現在堤体の外側には，消波ブロックが並べられ，先端部や上面はコンクリートで補強されている（図5～7）．平成13年には，町により一部補修された．こうした過程から，今日まで堤体は保護され，船澗としての機能を維持してきたといえる．

図8のとおり，堤体の平面形は，手カギ状を呈し，東西南北の軸に沿う形で築造されており，総延長は約67mを測る．堤体は，海岸の岩場を利用して岸から東へ約18m，そこから直角に南へ向き，さらに弧を描くように東へのび，先端部は円く収束している（図9）．図10のように堤体の断面形は台形で，上面の標高は高いところで3m強を測り，先端に行くほど石の段数が減り，標高も1.5m前後となる．幅についても波浪の影響を直接受ける南北軸から先端にかけて広くつくられている．堤体の上面には，船掛り用の係船柱が10ヵ所確認された．堤体の内側（袋澗）の面積は約500m^{2}あり，水深は1m未満と浅い．

堤体構造は，一辺30～40cm程度の方形の間知石が3～7段積まれ，隙間にセメント（あるいは砂利等）を充填した間知石練積み工法である（図11）．間知石とは，図12のとおり表面は方形であ

図２－７．泉の澗．２：澗全体（南西から），３：堤体近景（西から），４：測量風景，５：澗全体（北から），６：堤体先端より基部方向，７：堤体の先端方向．

るが，奥行きがすぼまる四角錐形を呈し，立方体の石を積むよりも耐久性に優れているといわれる．材質を見る限り，石材は島内で切り出し使用したものと考えられる．

なお堤体の北側海岸には，同じ工法で築造された幅 36m，高さ 6m 弱の石垣が存在する（図 4）．

考察

泉の澗の築造年代については不明な点が多い．当初，堤体に年代が刻まれていることを期待したが，今回の調査では残念ながら確認できなかった．

それでは，残されている文書や図面，報文に手がかりはないだろうか．

当地は，旧地名でノボリマナイ（アイヌ語名：ヌ

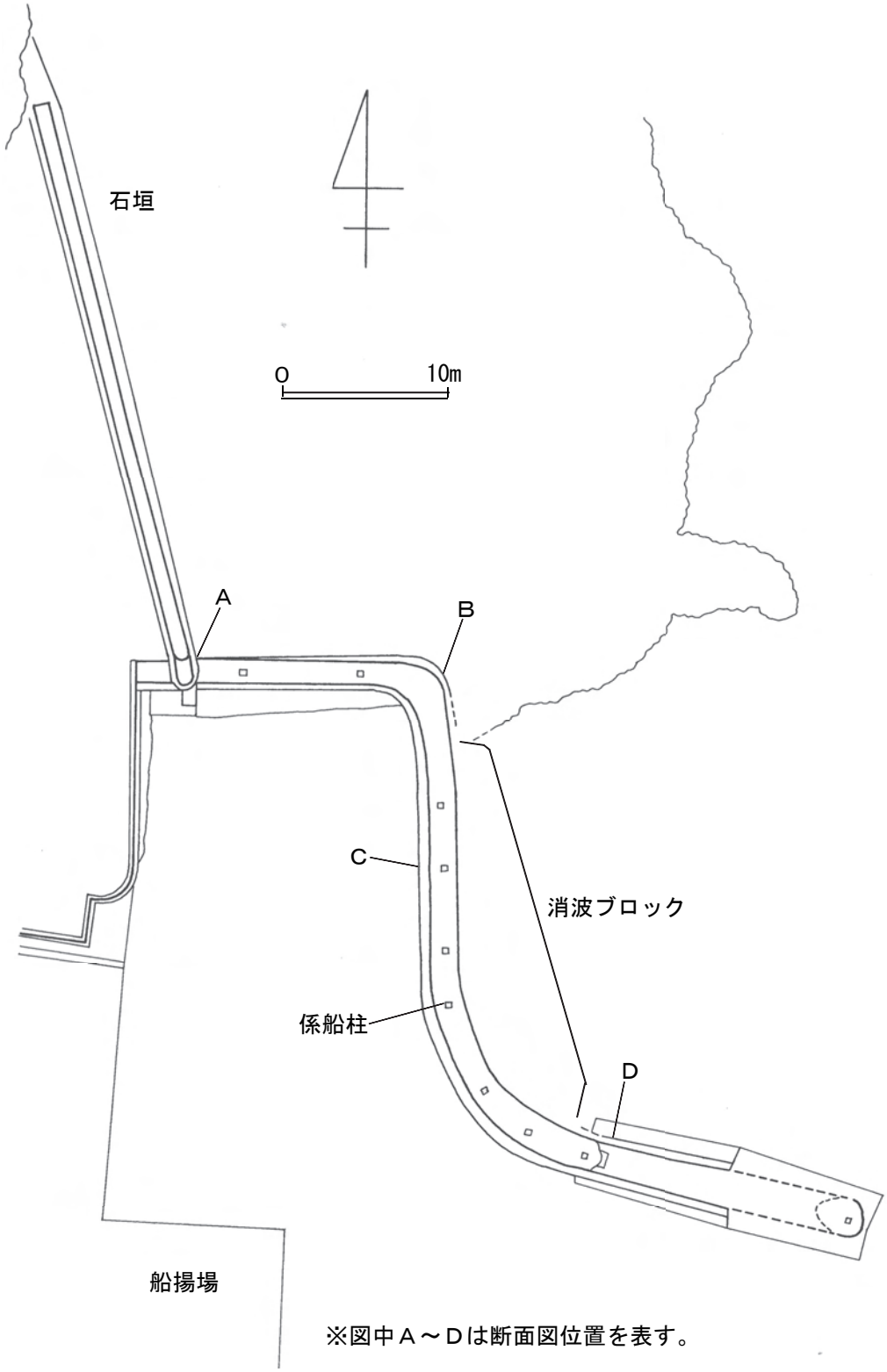

図８．「泉の澗」平面図（S=1/400）．

プリオマナイ）と呼称され，明治５年５月に陸奥国津軽郡藤島村の柳谷三平が宅地として割り渡しを受け，同時期に家屋を建築している（関，1988）．すなわち，その前浜が柳谷漁場として使用されたと考えられる．

一方，明治35年に発行された利尻全嶋地図には，当地にヤマカ吉田漁場がみえる（図13）．地図の裏面に印刷された「利尻全島実業諸家広告便覧」には，「ヤマカ　漁業　吉田松太郎」という広告欄が掲載されている．

図９．堤体先端部．

また，明治期の鴛泊・本泊土地図面には，吉田松太郎名義の土地の前浜に袋澗築造以前と思われる地形が描かれていた．その前浜には現在の堤体に沿うような形で突堤状の岩場が確認できる．つまり，泉の澗は元々の地形を有効に活用した袋澗なのであろう．

鰊定置漁業権の変遷では，当地の所有権は，山田（1985）によれば，大正12年に利鰊定第605号として吉田順一郎が登録されている．その後，昭和23年に本泊の泉八三郎に売買されている．

こうして当地は，柳谷→吉田→泉という漁場変遷をたどってきたことがわかる．図14は，泉氏に売買される前の漁場一帯を撮影したもので，写真中央の袋澗近辺に番屋が建っている．

ところで山田（1999）によれば，積丹半島における間知石練積み工法は，それまでの木枠石詰め工法を発展させた袋澗後期型で大正・昭和期に属するという．一方島内では，久連にある平田の袋澗や仙

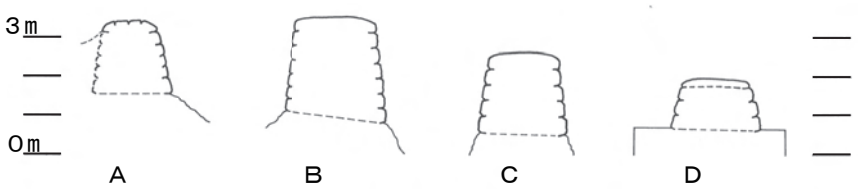

図10．「泉の澗」堤体断面図（S=1/200）．

図11－12．11：堤体の石積み状況，12：間知石．

図 13．明治期の鴛泊市街（利尻全嶋地図）．

法志にある伊藤の袋澗が，大正期に亀張りの堤体を修築あるいは築造していることが明らかである（工藤，1986，1991）し，同時期の礼文島でも間知石やモルタルを使った袋澗がつくられていた（北海道文化財研究所，1987）．さらに聞取りによれば，鴛泊地区に在住する 80 歳代の方々でも幼少の頃すでに泉の澗は存在していたという．こうした例から，現時点で泉の澗の築造年代は，少なくとも大正期以前と位置付けておきたい．

袋澗は，一般的にはなじみが薄いが，先学のご指摘どおり，産業考古学上あるいは北海道特有の近代土木遺産として文化財的価値が高い建造物である．今回調査した泉の澗は，数ある袋澗のなかでも，保存状況がよいうえに現役で使用されていることから，生きた文化財として活用できる可能性を持っている．今後については，立地が海岸であるため，波

図 14．戦前のノボリマナイ（梅谷哲夫氏所蔵）．

浪などによる堤体の経年劣化が進み，現地での永久的保存は厳しいと予想されるが，可能な限りニシン場の栄華を伝える「まちの財産」として保存，活用していくことが肝要であろう．

謝辞

現地測量に際しては，利尻富士町役場産業建設課牧野力係長と高橋真也技師にご協力いただいた．また，高橋技師には，本報告用に原図を作成していただいた．末筆ながらここに記して感謝申し上げたい．

本文註

1　泉の澗については，「泉のナマコ」という別称がある．その由来は，堤体の断面形がカマボコ形であることから，建築用語で使われる海鼠形に関係すると考えられる．

引用・参考文献

土木学会土木史研究委員会編，2000．日本の近代土木遺産 - 現存する重要な土木構造物 2000 選 -．

北海道文化財研究所編，1987．北海道文化財研究所調査報告書第 2 集　積丹半島の「袋澗」．

河野本道，1987．HTB まめほん 49 袋澗．北海道テレビ放送．

工藤浄真，1985．袋澗 船入澗 澗の調査研究についての中間報告．利尻郷土研究，(1): 27-31．

工藤浄真，1986．船入澗 袋澗の調査研究中間報告（その二）．利尻郷土研究，(3): 34-43．

工藤浄真，1991．船入澗，袋澗，澗の調査研究中間報告（その三）．利尻郷土研究，(5): 1-8．

関　秀志，1988．文化期～明治初期における離島の歴史．北海道開拓記念館研究報告 8 離島社会の歴史と文化：50-51．

山田大隆，1999．積丹半島及び磯谷・美谷地方 離島の袋澗の現況と保存課題．北海道の文化，71: 7-36．

山田　健，1985．利尻島における鰊定置漁業権の存在形態 -『免許漁業原簿』の内容と考察 -．北海道開拓記念館調査報告，(24): 39-88．